

文京遺跡出土の食関連遺物について

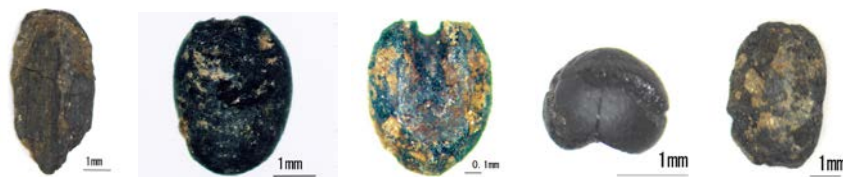
愛媛大学埋蔵文化財調査室

埋蔵文化財調査室では、大学構内遺跡の発掘調査報告書刊行に向けた整理作業を進めています。その中間成果報告を、今年度2回にわたってミュージアムエントランスでスポット展示しています。第3回は、愛媛大学城北キャンパスにある文京遺跡で発見された1,500年～2,000年前の食に関連する分析・検討成果を「文京遺跡の解明Ⅲ、食の記憶－1,500年～2,000年前の食生活」として、平成28年2月17日から3月31日まで展示します。

文京遺跡の解明Ⅲ 食の記憶－1,500～2,000年前の食生活

城北キャンパスの地下に眠る文京遺跡には、約2,000年前の弥生時代中期末～後期前半、大規模な集落が広がっていました。

- ①埋蔵文化財調査室では、当時の「食」の解明を目指して、ゴミを捨てた穴や住居内の炉跡の土を水洗篩別すいせんせんべつしています。その結果、炭化したコメ（米）、ムギ（麦）、アワ（粟）、キビ（黍）などの穀類やササゲなどの豆類、マダイやイノシシの歯骨片などが残されていることが分かってきました。当時の食生活は思った以上に食材が豊かです。また、コメが主体で、雑穀が少量伴います。現代の雑穀御飯に似ています。
- ②文京遺跡では、煮炊きに用いた甕が大量に出土していますが、どのように火にかけていたのか分かっていませんでした。甕の内外面に付いたコゲやスス、火を受けた痕跡の観察結果から、これまで考えられていた煮炊きの方法と異なり、甕を斜めに傾けた煮炊きを明らかにできました。



水洗篩別で採取した穀類・豆類（左からコメ、オオムギ、アワ、キビ、ササゲ属、〈いずれも弥生時代〉）



水洗選別で採取した歯骨片（左上からタイ科歯〈弥生時代〉、マダイ椎骨〈古墳時代〉、イノシシ臼歯〈弥生時代〉、イノシシ／ニホンジカ指骨〈古墳時代〉）

甕を斜めに傾けて煮炊きしていた様子（復元）